

## 徴用令書

甘木市 森山 実

それは、よく晴れた日でした。冬の季節ではこんな日は珍しい、私は「今日はお天気がよいので農作業も忙しくなるぞ」と呟きながら家を出た途端、向こうから自転車に乗って大急ぎでこちらにやってくる、大福村役場の用務員さんの姿が見えました。私に近づくと「徴用令書です、名誉なことでおめでとうございます」そう言って、一枚の紙を手渡すとそのまま帰って行きました。

それは、太平洋戦争勃発の日より2カ月後の、昭和17年2月22日、私が17才の時でした。

戦争当時、召集令状のことを赤紙といい、徴用令書のことには白紙とっていました。その徴用令書には、「昭和17年2月27日より2年間、佐世保海軍工廠勤務を命ず」と書かれていました。私は、この時ほど、たった1枚の紙に責任を感じたことはありませんでした。

5日間はアツというまででした。27日は私の出発の日です。出征軍人と同じようにバス停まで、戸主会、国防婦人会、青年会、処女会、在郷軍人会の人達が見送ってくれました。皆に挨拶を済ませてチラッと両親の方を見ると、心配そうな両親の顔がこちらを見ていました。やがてバンザイの声と共にバスは発車しました。

鳥栖駅で専用列車に乗り換えた私は、両親と別れました。その列車には見届役として、各市町村役場の兵事係の人が乗っているだけでした。

私達は、なにか監視でもされているような気がして、ただ黙って乗っていました。

佐世保駅前広場に番号順に整列させられた私達は、福石寮、日野寮、天石寮に分けられて入寮しました。私の入った寮は、海軍工廠から二番目に遠い天石寮でした。早速、私の初めての入寮生活が始まったのです。

午前6時起床で始まり午後9時消灯で1日が終わりました。最初の頃は、消灯までに手紙を書いたり、同郷の人と話す時間が十分すぎるぐらいありましたが、戦争が激しくなるにつれ早出残業が多くなり、そのうち日曜もなくなりました。

私達は、消灯後の暗い廊下を通して部屋に帰り、手探りで布団を敷いて寝るだけの日が多くなり、同時に食料不足から食事の量がめっきり少なくなっていました。

それでもまだ、街角や道端で徴用饅頭という名前のつけられた饅頭を売っていました。饅頭といっても、サツマ芋を煮て潰して丸め、外側にきな粉がかけただけの粗末な食べ物でしたが、それも、いつの間にか姿を消してしまいました。これから先は、いつも空腹の毎日でした。

残業は、いつも午後10時まででしたが、仕事がすんで歩いて帰る時は、空腹のため、ただ前の人について歩いているだけ、とでもいいでしょうか、どこをどう歩いて帰ったかよく覚え

ていません。

この頃から、修理する艦船が増えてきました。航空母艦（赤城、加賀、飛竜）、戦艦（長門、金剛、榛名、扶桑）、重巡洋艦（妙高、羽黒、足柄、那智）、などが入港してきましたが、修理を終え出港した艦船は、二度と姿を見せるようなことはめったにありませんでした。

ある日、戦艦扶桑の修理作業をしていた私は、左指を傷つけてしまいました。血は周りを真っ赤に染めました。血と油に塗れた手を洗っていると、後ろの方から「痛いでしょうが、石鹸をつけてよく洗わないと、後で黴菌が入りますよ。これでよく洗いなさいね」そう言って石鹸を持ってきてくれた人がいました。振り返ると、それは20才くらいで、とても綺麗な女の人でした。洗いかけの湯呑をそこに置くと、持っていた手拭いを裂いて包帯代わりに巻いてくれました。私は今まで女の人からこんなに親切にしてもらったことがないので、思わず涙がこぼれました。血は手拭いを真っ赤に染めていました。女の人が、「職場に帰って、許可をもらったら、すぐ病院に行きなさいね」と言ってくれたので、職場に戻り、組長の所に許可をもらいに行ったのですが、その日は許可してもらえませんでした。

その夜、痛みはじめた指は熱をもち、一晩中疼きました。朝になって見ると、指は饅頭膨れしていました。

腫れあがった指を見ると、組長は、病院に行くことを許可してくれました。軍医は、ちょっと見ただけで切開を始めました。

職場に戻ると、また仕事が待っていました。動けない人以外は休めない時代で、右手だけで仕事をしました。病院に治療にいったのも、その日だけだったと思います。私は、この時の傷が原因で左の親指の関節は、全然動かなくなっています。

もう少し治療してもらえたら……と思うと残念でなりません。しかし、これは年寄りのたわごとでしかないのです。

私の徴用期間は2年間でしたが、期間がくるたびに延期されました。

終戦になって、私達の徴用は解除されました。それは、徴用令書を受け取った年から数えて4年後のことでした。

もうだいぶ前になりますが、労働組合の九州大会が、佐世保国際観光ホテルの大広間で行われました。大会代議員に選出された私は、二度と行きたくないと思っていた佐世保市を訪れました。佐世保海軍工廠跡はすっかり変わっていて、戦争の頃の面影はどこにも見当たりませんでした。